日本庭園の茶室周辺の植栽変更

小川恒彦・井上尚子

2019年12月から2021年10月にかけて、日本庭園茶室周辺の植栽変更を行ったので、記録する。

1. 茶室東側花壇の植栽変更

2019年12月に、コケの見本園、通称『苔のパッチワーク花壇』を撤去し、サツキツツジを中心とした植栽に変更した。

日本庭園の茶室の東側は、2016年に、様々なコケを一度に観賞できる見本園として整備した(久保・小川 2017)。植物公園の新しい魅力づくりとして期待されたが、様々な環境に適応したコケを一様に育てるのは難しく、除草作業も繊細かつ高頻度に行う必要があり、寒冷紗を設置したり、灌水の仕方を工夫したり努力したものの、猪やタヌキ、モグラ等の獣害も頻発し、数年が経過すると荒れた状態になった(写真1)。

そこで改善方法が見つかるまで『苔のパッチワーク花壇』は一旦撤去し、当面は別の植栽に変更することにした。

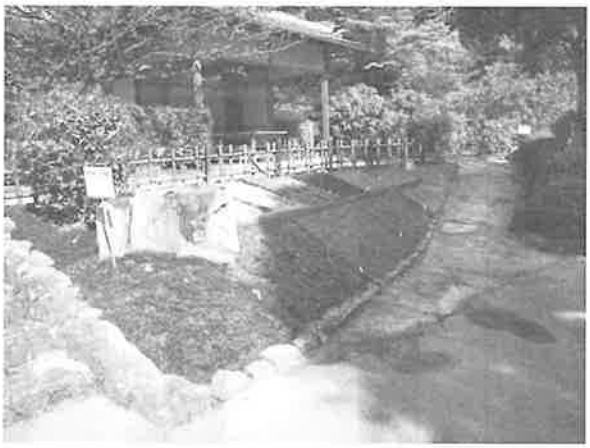

写真1　撤去前の『苔のパッチワーク花壇』

日本庭園には花菖蒲園があり、5月下旬から6月下旬の花期は、見どころの一つとなっている。そこでこの時期の日本庭園をさらに魅力あるものにするため、植栽植物として、花菖蒲とほぼ同時期に開花するサツキツツジを選択した。

2019年12月、『苔のパッチワーク花壇』跡地には、赤色系サツキツツジ'大盃'20株と白色サツキツツジ'博多白'29株を帯状に交互に群植した。植栽地は勾配が急であり、水やりや降雨のたびに土壌が流れ落ちる。それを防ぐ土留めとして周辺にはリュウノヒゲを植栽した(写真2)。

写真2　新しく植栽したサツキツツジ

また、植栽地の上部に茶室の待合方向からの来園者踏み込み防止のため設置していた「四つ目垣」は老朽化していたので新しく作り直した(写真3)。

写真3　四つ目垣を作り直す作業の様子

2. 茶室南側花壇の植栽変更

2021年3月から10月にかけて、日本庭園の茶室の前の植栽を景石とツツジ類を中心としたものに変更した。

日本庭園の茶室の南側には、茶室にちなんでチャノキが植栽されていたが、この場所は乾きがちで生育が悪かった。また木と竹で組んだしがら(水流や土砂をせき止めるために、杭を打ち並べて、その両側から柴や竹などを絡みつけたもの)が腐敗して崩れていた(写真4)。さらに雑木や雑草も目立つようになり美観をそこねていた。そこで植栽の見直しを図ることとした。

写真４　植栽変更前

当該区域は日本庭園の入り口に当たるため、植栽品目の条件として、年中整った状態が維持出来るもの、日本庭園のコンセプトが伝わるもの、撮影スポットになりうる魅力あるもの、の三点を挙げた。その結果、広島県安芸高田市向原町産の景石を主として配置し、ツツジを添える構成で落ち着いた雰囲気の植栽とした（写真５～７）。

変更前の植栽のうち、チリメンガシとウバメガシの仕立物（玉散らし）、台杉、植栽区の西側から伸びて正面左手にかかるカエデの枝、周囲を囲む生垣などは、そのまま活かすことにした。作業の概要は、以下の通りであった。

工期	作業内容	実施者
１月	チャノキ、ヤブラン、アジサイ、ヒイラギモクセイなど抜根、撤去。古いしがら撤去	直営
３月	擬木の杭と板で土留め。真砂土の客土	委託
１０月	庭石（広島県安芸高田市向原町産　流紋岩。5石　8ｔ内外）搬入、据付。園内の管理道で養生していたサツキツツジを移植	委託
2月予定	表土に白川砂（5分）敷き詰め	委託

写真５　チャノキ等撤去作業の様子

写真６　景石搬入、据付の様子

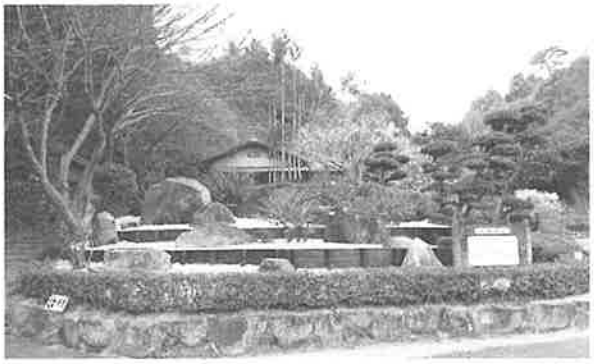

写真７　景石据付、サツキ移植後

園内にはコケが絨毯のように繁茂した場所や、コケに覆われた岩がある。コケには奥深い魅力があり、日本庭園の世界ばかりでなく新しい園芸植物としても注目されている。今後、コケの栽培方法を学び直し、改めて美しい『苔のパッチワーク花壇』を展示することに挑戦してみたい。

最後に、垣の作成等にご協力いただいたガイドボランティアの秦治彦氏に御礼申し上げます。

引用文献

久保晴盛・小川恒彦 2017. 日本庭園の改修とコケ庭・コケ見本園「苔のパッチワーク花壇」の新設について. 広島市植物公園栽培記録 38:45-47